

「Education」

中垣 芳隆

過日の新聞報道によると、福井県池田町の町立池田中学校で今年 3 月、2 年の男子生徒(当時 14 歳)が校舎 3 階から飛び降り自殺した問題で、生徒が担任から大声で叱られたり、副担任から理詰めですつこく指導されたりしている場面を、校長や教頭が目撃していたことが分かった、という痛ましい記事が掲載されています。

思い起こされるのは、大阪市立桜宮高校の事件。当時、バスケットボール部主将だった男子生徒は、顧問から平手打ちや暴言を繰り返し受け、2012 年 12 月に自殺。顧問は懲戒免職となり、傷害と暴行罪で有罪に。遺族は市を相手に損害賠償を求める裁判を起こし、2016 年 2 月に元顧問の暴行を自殺の原因と認める判決が出されました。

教育関係者にとって看過できないこうした報道のある中で今回の事件が生じました。

学校の危機管理の問題と同時に、改めて教育とは何かを根源的に問いかけられる出来事です。何かとストレスの過重な現代社会において、今必要とされるのは言葉の真の意味での「エディケーション」かも知れません。

周知のごとく「エディケーション」の動詞「EDUCATE」の語源はラテン語の「EDUCATUS」で、「E」は「外へ」を意味する接頭語で、「DUCERE」は「導く」で、「能力を導き出す、引き出す」という意味になり、更に辿れば *educatio* というラテン語に行き着きます。この語は、「大きくする *educare*」と「引き出す *educere*」の二つの動詞を派生させています。

このことから、教育という語には、子どもが生れついても諸能力を引き出すとともに、生れついてもつ状態を無視することなく、その諸能力が発現できるように、外部から働きかけるといふ二様の意味があります。つまり、内的な自然な成長と外部からの働きかけといふ二つのベクトルの相互作用による複合的な営みが、教育ということになります。

言葉を替えれば、学校での教育活動の社会的成果も、雨が地表から浸み込んで、地中に蓄えられ、さまざまな栄養分を溶け込ませて、そして何十年もの時間をかけて私たちの生活を潤わせるように、ゆっくりと、しかし確実に、私たちの未来を創造するものでしょう。

金子みすずさんの言葉ではないですが、「みんな違って みんないい」、人間には、それぞれの顔が違うように、それぞれの個性と可能性があります。エデュケーションの成果としての「みんな違って みんないい」という気長な心持ちになることが、「穏やかな社会」をつくりだす原動力になるのではないかと、そして、私たちの社会の未来を、そして子供たちの未来を創造するための、遠くを見る眼差しが今こそ必要とされていると思う今日この頃です。

(中垣芳隆 教授/教員養成センター)